五神の国―光輪の仇―

海夜音琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
五神の国―光輪の仇―

【Ｎコード】
Ｎ６０５６Ｗ

【作者名】
海夜音琴

【あらすじ】
剣と魔法、そして科学によってチカラを示す世界。そこには、五つの大国があった。人間が支配し、科学の発展した【賢の国】。エルフが支配し、伝統を重んじる【巧の国】。魔族が支配し、魔法の栄える【魔の国】。獣人が支配し、決闘の止まない【武の国】。万人が闊歩し、平等を掲げる【和の国】。五つの国は互いを牽制し合い、【和の国】を除いて合い間見えることはなかった。
戦闘に関しては二人で一つのテラとリドル。一年前に出会った少女テイルは一体何者で、彼女に渡された光輪とは何なのか。様々な謎

を追うため、そして両親の仇を討つために二人はギルドの戸を叩く――。

企画「五神の国」参加作品です。

ギルド

「スゲー……」

「本当やなあ……。うちこんなん初めて見たんやけど」

背中に短槍を携えた少女と、腰の左右に鞘を携えた少年が大きな建物の前で立ち尽くしていた。

この建物は世界最大といわれる大型ギルド、ライゼ・フォルク。五大国――賢の国、巧の国、魔の国、武の国、和の国――の間の中立地域にあり、厳しい入局試験に合格した様々な種族の者達が在籍する場所である。

「よっし！　早速入局試験受けに行こで！」

意気込む少年を、少女は冷静に止める。

「リディ、待ちぃや。もう夜遅いんよ？　試験は明日にして今日はもう寝ようや」

ふわあ、と大きな欠伸をする少女。リディと呼ばれた少年、リドルは、少し考え「せやな！」と明るく言い放ち、自分達の泊まる宿へと歩き出した。その後ろを、眠そうに目を擦る少女テラがゆっくりと着いていく。

宿に入ると、テラはツインテールに結った琥珀色の髪をほどいた。腰に届くウェーブのかかった髪が、ふんわりと広がる。それと同時

に、それが露になった。
先程髪を結っていた部分に、ちょうど二本の小さな角がある。この角から、彼女が魔法に長けた魔族であることが分かる。
テラは何故か角があるのを嫌い、いつもそれを隠すように長い髪をツインテールにしていた。彼女が髪を下ろして外に出るのを、今日まで十五年間、幼馴染みをしているリドルは一度も見たことがない。
リドルはふと、自分の角――リドルも魔族なのだ――に触れた。
リドルの角は相当小さい。普段は藍色の髪の毛に埋もれて見えず、それでいて先端は鋭利で思いっきり触ると自身の手が傷付いてしまう。
リドルは別段、自分の角が嫌いではなかった。

「何でテーは、角が嫌なん？」

鏡の前で髪を梳くテラに、リドルが二つあるベッドの片方に座って朗らかに問う。

「何か目立つやん、この角」

鏡ごしにぷくっと頬を膨らませるテラは、リドルの深い緑色の瞳には可愛らしく映った。

「ほやけどギルドには色んな種族がおるって聞くし、あんま目立たんのじゃね？」

「例えばどんなんがおるん」

「んっと、確か経理・勧誘課の奴が鳥人っていう少数民族やったと……」

「ふーん。でもうちはこの角が嫌いや」

ぷいっと立ち上がると、テラは入口からみて左側にあるベッド――リドルが座っていないほう――に横になった。

「もう角はかまんけん、寝ようや。うち眠くて堪らんのよ」

「せやなー。おやすみ」

リドルが明かりを消す。

（入局試験はいよいよ明日か……。ギルドに入るためにがむしゃらにやってきたこの一年間、無駄には出来ん。ギルドに入る目的は色々あるけど、何よりテーのために、俺は頑張らないかん）

リドルは決意したように一人頷くと、先程から聞こえるテラの安らかな寝息を子守唄に、眠りに落ちた。

きっかけ

和の国のリバティ村。小さい村だが海が近く、一日中潮の匂いに包まれている。海が近いおかげで漁業に優れ、村人みんなが裕福に暮らしていた。

ある日、潮の匂いが一層強い浜辺に十四歳のリドルとテラが座っていた。

「……ねえリディ」

「ん？」

テラのツインテールの毛先が、風に踊る。

「……前の村の皆は、元気やろか」

「多分、元気やろ」

「……じゃあ、お父さんとお母さんは……天国、で、元気にしとるやろか」

リドルは思わずテラを見た。テラは瑠璃色の瞳で、海の先をじっと眺めている。

リドルも同じように海を見つめ、

「どやろなあ。テーの両親やし、元気しとんやないか？」

「……ほやったらいいなあ」

淋しそうなテラの横顔は、はっとするほど綺麗だった。
テラとリドルは、数ヶ月前まで魔の国に住んでいた。しかしテラの両親が怪物（エネミー）と呼ばれる分差万別の化物に襲われ、他界。孤児（みなしご）となったテラを、リドルの母親パララが引き取った。悲しみに沈み家から出られなくなったテラを気遣い、パララとリドル、それにテラの三人でこちらに引っ越してきたのだ。今では元通りの明るさを取り戻したと思っていたが、心の傷は簡単には癒えないらしい。テラの淋しそうな横顔を見て、リドルもまた哀しくなった。

「……ねえリディ」

「ん？」

「……あれは、何やろか」

「うん……ってへ？」

生返事をしたリドルは我に返り、テラの指差す方向に目を凝らした。
白い物体が海を漂っている。波に揺られ、あっちへこっちへゆらゆらと。

「な、何やろか……。まさか怪物（エネミー）？」

「……怪物（エネミー）？」

怪物（エネミー）と聞くと、テラの目付きが変わった。瑠璃色の瞳に憎悪の炎が宿る。

（ヤ……ヤベー！）

リドルは己の発言を悔いた。テラは両親を殺された一件から人一倍怪物（ネミー）を嫌い、その名を聞くだけで精神が不安定になる。怒り狂う時もあれば、泣き出す時もある。だから、テラの前では“怪物（エネミー）”という言葉は御法度なのだ。

「……うちの前に現れることがよう出来るなあ」

ドスの利いた声で呟くと、テラはすくっと立ち上がった。そしてそして背中に括りつけた革から短槍を抜き取る。彼女の膝から足まで程の長さのそれは、テラがずっと愛用している武器だ。

「リディ、あんたももちろん手伝ってくれるよね？」

短槍の柄の先っぽについている細長い刃が、キラリと妖しく光る。

「も……もちろん！」

引き攣った笑いを浮かべながら、リドルは右手を腰の左側の鞘に、左手を腰の右側の鞘に伸ばし、二つの剣を一気に、器用に引き抜いた。どちらの剣も刃が反っていて使いにくそうだが、これがリドルの愛用する双剣である。

「さあ、来てみいや」　テラが不敵な笑みを浮かべ、短槍を構える。

怪物（エネミー）かもしれない白い物体は、波に流されこちらに近付いてきていた。ここからだと直視できる距離だ。

（えーっと、耳みたいなんがあるなあ。それから顔があって体があって耳があって……。ってあれどう考えても違うやん！）

「テ……テー！　ごめん、あれ怪物（エネミー）やないわ！」

「……へ？」

テラの瞳から、憎悪の炎が消えた。リドルは相棒達を鞘に収める。

「テーは俺より目ぇ悪いけん見えんかもしれんけど、多分あれ獣人やわ」

獣人……。武の国を牛耳る力の強い種族である。どの種族でも出入り可能な和の国にあるこの村には、獣人の男が一人だけ住んでいた。

「獣人って、マッチョンさんと同じ種族の？」

「うん。……あー、多分やなくて絶対やわ、あれ」

リドルが目の上に手を当てて獣人を観察している。どうやら、あれこれ会話をしている間に浜に打ち上げられたようで、水に濡れた尻尾を絞っていた。

それは女の子だった。白銀の髪に同色の耳、露出の多い服装は水に濡れ、色っぽさを感じる。猫のような目でこちらを見て、片手を挙げた。

「ねー、そこの人達ー！　ちょっと話そうよー！」

アルト域の聞いていて心地好い声が、浜辺に響く。

「どうする？　行く、それとも行かん？」

リドルが尋ねると、テラは短槍を背中に戻した。

「行こや」

短く言うと、テラは短槍を括りつけている革と同じ素材で作られたショートブーツで、砂浜を踏み締めて歩いて行く。リドルもその後をひょこひょこと付いていった。

「どうしたん？」

猫型の獣人の女の子と対峙する。グレーの瞳が、人懐っこそうに笑っている。

「えっとねえ、ここはどこ？」

「ここは和の国のリバティ村やけど、あなたは誰？」

「ふーん、そうなんだ。自分はテイル。あんた達は？」

「うちはテラ。んで、こっちがリドル」

テラが目で一歩下がった所にいるリドルを示す。

「それじゃ、テッチとリッチだね。名字は？」

「バルスルやけど……」

テラは、そこまで聞くん？　と、少し訝しげな表情になった。

「テラ・バルスル、ね。リッチは？」

「ローウェル」

「リドル・ローウェル。ん、覚えた」

ニカッと笑うテイル。笑うと八重歯が見え、可愛らしい。

「テイルは、何で海を？　てか、どっから来たん？」

「んー、秘密」

テイルは色白の細い指を、テラの唇に当てた。その仕草――格好もだが――が妙に色っぽく、同じ女のテラが一気に赤くなる。

「ところでテッチはさ、これ見える？」

テイルはふふっと笑い指を引っ込めると、腰に付けたポーチからそれを取り出した。

光の粒子が集まってぼんやりと形作った、触れば光が散ってしまいそうな儚げな指輪（リング）。それを、テイルは指で摘まんでテラに見せた。

「見えるよ。何か、触ったらポロポロって崩れそうやね」

「見えるんだ。リッチは？」

「俺も勿論見えるけど？」

「そう……。自分はね、これ見えないの」

テイルは耳と尻尾を下げ、悲しそうな表情を浮かべる。

「見えんって、どういう意味？」

「そのまんま。テッチの言う、触ったらポロポロと崩れそうな物が、自分には見えないの。触った感触はするけどね」

テイルはテラの左手を取ると、人差し指にその指輪を嵌めた。

「これはね、光輪（こうりん）って言うの」

「コーリン？」

「そう、光輪。……テッチ、これは貴女にあげる」

テラの指に光輪を嵌め終えると、テイルはテラ達にくるりと背を向け、海に向かい始める。

「それじゃ、さよなら」

「ちょお！　何でこんなんをテーにやるん！？」

「いずれ、時が来れば分かるわ」

必死に問うリドルに、テイルは振り返らず淡々と告げた。

「……また、会える？」

テイルは立ち止まり顔だけを後ろに向けると、テラに向かってニヤリと笑い、

「自分はあちこちを放浪している。自分に会いたいと思うならここを出な。もし運が導き再び出会えたのなら、全てを教えてあげる」

ふふっと妖艶な笑みを浮かべると、テイルは海に飛び込んだ。その姿はすぐに海に呑み込まれ、テラ達には見えなくなる。

「……何やったんやろな」

リドルが呟くとテラはそれには答えず、背後にあるテトラポッドに腰をかけた。

「……ねえリディ」

「ん？」

リドルも静かに、テラの隣に腰を下ろす。

「うちね、ギルドに入ろうかとずっと思っとったんよ」

「え！？　ギルドって、テー大丈夫なんか？」

ギルドといえば、怪物（エネミー）の討伐が主な仕事だ。言葉を聞いただけでも取り乱すテラが、そんなギルドの仕事をこなせるとは到底思えない。

「今のままやったらうちやって出来るとは思ってない。ただ、ちょっとずつでも気持ちが不安定になるんを克服していって、ギルドに入ってお母さんらの仇を取りたいんよ」

テラは燦々と輝く太陽に左手を向ける。光の粒子が朧気に形作っ

ている光輪が、陽の光を受けてキラキラと輝いた。

「今日テイルに会って、やっぱ入ろうって思った。ほら、ギルドに入ったら色んな国に行けるやん？　ほしたら、テイルに会えるかもしれん。うち、あの娘にはもう一回会わないかんと思うんよね」

「……」

リドルは腕は組み、目を瞑って何か考え込んでいる。

「……反対なん？」

心配そうなテラの声が耳に届くと、リドルは目をかっと見開き、勢いよく立ち上がった。

「よっし！　ほんなら俺もギルド入る！」

「へ！？　本気なん！？」

「おう！　俺やってギルドに興味あるし、何よりテーの魔法は回復系、俺のんは攻撃系やろ？　ってことは、俺とテーが組んだら最強ってことやん！」

目をキラキラと輝かせ、リドルは熱弁する。その光景は彼を実年齢よりも幼く見せ、微笑ましい。

「最強かどうかは分からんけど……。でも、リディがおったら心強いわ」

「やろ？　よーし、そうなったら早速修業や！　二人で頑張ろで、

テー！」

座ったままのテラに、リドルは手を差し出す。テラはにっこり笑顔でその手を取り、ぴょこっと立ち上がった。

「うん！　頑張ろな、リディ！」

潮風が優しく、決意した幼い二人を包み込んだ。

宿の一コマ

「……夢、やったんか……」

まだ日の昇りきっていない時刻にテラは目を覚まし、体を起こそうとした。しかし背中に激痛が走り、小さく呻く。

「いたた……。路銀ケチってやっすい宿なんかに泊まったけん、固いベッドのせいで背中ガチガチやわ……」

顔をしかめ、背中を擦りながらゆっくりとベッドから立ち上がった。

リドルは、まだぐっすりと眠っている。元々どこでも眠れる奴ではあるが、このベットでぐっすり眠れるとは中々の強者だ。

「よう寝れるなあ……」

テラは呆れたように呟くと、スッと目を閉じる。

「水神の宿る我らが安息の地、“癒しの泉（ヒールスプリング）”」

テラが詩のような言葉を述べると、大きな水の玉がテラを包み込んだ。

それはコポコポと音を立てると、勢いよく弾け飛ぶ。水滴が部屋のあらゆる所に飛び散るが、どこも濡れはしなかった。包まれていたテラでさえ、どこも濡れていない。

「んー、背中治ったわぁ。うち、回復系の魔法得意でよかったあ」

テラは手を思いっきり伸ばして、うーんと伸びをする。
その時ふと、先程まで見ていた夢のことが頭を過った。
「懐かしい夢やったな……。あれからもう一年経ったんや」
怪物嫌いを克服する為に、幾度となく戦ったこの一年。最初の内は失敗続きだったが日が経つにつれ、テラは弱点を克服していった。今では言葉を聞くのは勿論、怪物本体と対峙することだって平気である。
怪物克服の過程で、必然的に魔法や武器の腕も上がり、テラとリドルは一年前に比べればはるかにステップアップしていた。
「一年前を考えたら、うちらようやってきたなぁ」
テラはくすりと笑い、左手をあの日のように挙げた。光輪はあの輝きが失せることなく、人差し指に朧気にある。
（テイル……）
心の中で、あの獣人の女の子の名を呟く。彼女には、あれ以来一度も会っていない。
「結局、あの娘は謎だらけやったな。まぁ、その謎を追うためにギルドに入るんやけど」
テラは挙げていた手を下ろし、ぎゅっと握る。
「大丈夫。今のうちらやったら、絶対受かる。大丈夫」
テラは自分を勇気づけるように言うと、未だぐっすり眠っている

リドルに近付いた。
幸せそうに眠るその寝顔の頬に、テラはそっと手を添える。
「一年前、リディが一緒に来てくれることになって、めっちゃ嬉しかった。うちがここまでやってこれたんは、リディのおかげでもあるんよ。ありがとう、リディ」
テラは薄く微笑むと、桜色の唇を彼の頬に近付け、その頬にそっと、口付けをした――。

＊

リドルが目を覚ましたのは、外が大分明るくなってからだった。
「ふわぁ……。テー、おはよー」
大きな欠伸を一つし、目を擦る。リドルの、いつも通りの朝の光景だ。
「……このベッドでいつも通りに起きるって、ある意味凄いわ」
「え、何か言うた？」
「何も言ってないよ？　おはよ、リディ」
何か言われた気がしたが、テラが爽やかな笑顔で挨拶をしてくれたので、気にしない。

「あぁー、試験到頭今日やなー！」

リドルはベッドからノロノロと下り、うーんと伸びをする。

「ほやね。それが分かっとんやったら」

テラはそこで言葉を切り、磨いていた短槍の、切っ先をリドルに向けた。

「朝はよ起きて、武器磨くなり、トレーニングするなりが、普通やないん、リディ？」

ニッコリと可愛らしい笑顔を浮かべるテラだが、その言動と行動にあまりにもミスマッチで、リドルは泣きたいような、笑けてくるような何とも微妙な心情となった。

「何でそんな変な顔しとん。そんなんしよるんやったら、はよ支度して食堂行こや。うちお腹ペコペコなんよ」

向けている凶器を素早く半回転させ、薄い水色の柄の先っぽでリドルのおでこを軽く突く。

突かれたリドルは、あう、と男らしくない、可愛らしい声を漏らした。

「変な顔とかひどっ！　ワタシはアナタを愛しているというのに、そのワタシを変人呼ばわり！　あぁ、駆け落ちしてまでアナタと結婚したワタシがこんな扱いを受けているなんてお母様が知ったら、どんなに哀しむことか……」

さめざめと泣く（フリ）リドル。勿論、テラはそれを冷めた目で

見ている。

「うちはあんたと駆け落ちなんかしてないし、結婚もしてない。分かったらはよ準備して」

お腹の空いたテラは今まで聞いたことのない低い声で告げ、孫悟〇と呼ばれる猿の棒さばきのように短槍をぐるぐると回し、綺麗に背中に収めた。

彼女がこのように短槍をしまうのは、本気でキレそうな時である。

「じょ……冗談やって、テー！　今すぐ準備するし、怒らんとってや？」

リドルは両手を合わし、テラに懇願をする。

テラはそんなリドルを見下し、扉の前に腕を組んで仁王立ちになった。

「分かったけん、はよしてや？」

「お……おう！　あ、さっき冗談って言ったけど、愛しとんは本当やけん！」

支度をしながら、さらりと言ってみる。しかしテラは表情一つ変えず、

「はいはい。それもう聞き飽きたわ」

欠伸をした。

（本当に愛しとんやけどなー。テー絶対信じてないわ……。まぁ、

冗談混じりにしか言えん、俺も俺やけど）

こっそりと溜め息を吐き、支度を終わらしたリドルはテラの前に立ち背筋をピンと伸ばす。

「準備終わりました、隊長！」

「よし、食堂行こ」

余程お腹が空いているのか、テラは足早に部屋を出て行く。リドルも早足で進み、テラの横に並んで歩き始めた。

「そうや。今日テーに、ほっぺにチューされる夢見たんやって」

「……。実際、タコかなんかにキスされとったんやないん？」

嬉しそうに話すリドルは、返すのに若干の間があったテラの顔をそっと覗きこむ。

「……何（なん）？」

「いや、何か間があったと思って」

「そう？　あー、もうお腹空き過ぎて限界やー」

わざとらしくお腹を抑え、少し小走りになるテラ。リドルはその一歩後ろを走りながら

「そんなにお腹空いとんやったら、俺起きるん待たずに食べれば良かったのに」

テラはピタリとその場に立ち止まり、顔だけをリドルへと向ける。

「リディが、一人で食べるんはつまらんやろうなぁ、て思ったけん。待っとったうち、偉かろ？」

にっと得意気に笑うテラは、本来の歳より幼く見えた。

初ハイブリッド

二人は昨日と同じように、ライゼ・フォルクの前に立っていた。
緊張しているのか、両者共顔が少し強張っている。
しかし、テラの盛大なゲップでその緊張感は破られた。

「ケプーッ！　あぁ、朝からお腹ポンポコリンやー」

「そりゃあんだけ食えばポンポコリンになるに決まっとるやろ！」

ポンポンのお腹を擦りながら苦しそうにゲップをするテラと、それに強く言うリドル。先程とは立場が逆転している。

「あんだけって、うち、そんな食べてないよ？」

「ニワットーリを一羽分がそんな食べてないんには入らん！　俺でも半分しか食べてないんで！？」

ニワットーリとは家畜で、白い体が特徴の鳥だ。卵も絶品だが、丸焼きは卵以上に美味い。

「やって、食べられるために殺されて、しかもそれを半分しか食べてもらえんって可哀想やん！　丸々一羽分食べるんが、ニワットーリへの礼儀やろ！」

「……テー、どんだけ動物が好きなん」

ポンポコリンになる程食べてしまったのは、動物が好き過ぎてからのことだったようだ。

テラの動物好きには、時々目に余るものがあったりする。

「やって動物、ふわふわもふもふで可愛いやん！　マッチョンさんの耳とか大好きやったなー」

マッチョンさんとは、リバティ村に住んでいた狼型の獣人だ。焦げ茶色の耳と尻尾をもち、それらはとてもふわふわでもふもふであった。

テラがほぼ毎日、マッチョンさんの耳を狂ったように撫で回していたのを、リドルはつい昨日のことのように覚えている。

「いっつも撫で回しよったもんなぁ」

「うん。あー、あの感触が懐かしい」

恍惚とした顔で自らの掌を眺めるテラは少し、いや、大分怪しい。リドルは思わず、苦笑いを浮かべた。

「そういやテーさ、テイルの耳は触りよらんかったな。何で？」

あの謎の少女も、確か耳があったはずだ。

「あー。テイルのはさ、濡れとったし毛が短かったけん」

（……分からん！）

どうやら、テラなりのこだわりがあるらしい。リドルに、それは理解出来ないが。

「んじゃ、そろそろ中に行こっか」

「……おう」

「どしたん、リディ？　何か疲れとるよ？」

お前のせいだとは言えず、リドルは力なく首を振る。

テラは意味が分からず不思議そうな顔をしていたが、リドルが促し、何とかライゼ・フォルクの戸を叩いた。

ギルドの前に着いてから凡そ一時間経ち、二人はやっと入局試験へと向かう――。

＊

「おー、すっげー！　これがギルドかー！」

大型ギルド、ライゼ・フォルクに入った最初の言葉が、リドルの言ったそれだ。

（うるさ！　リディめっちゃテンション上がっとるし、うちじゃ止めれんで……）

「リディ、ちょっと静かにしてや」

顔をしかめ耳を押さえつつ、リドルを窘めるが、テンションの上がった彼は止まらない。

「ほやけど憧れのギルドなんやし、ちょっとは許してや、テー！」

キラキラと輝く純粋な瞳を向けられては、何も言えなくなる。テラは小さく溜め息を吐くと、リドルを放置することに決め、ギルドをぐるりと見回した。
中は、散らかっているとも片付いているとも言えない微妙な感じで、ポツポツと至る所に人がいる。
中でも目についたのは、赤髪の男だ。燃えるような頭とは対照的に、目は涼しげな水色の瞳で、何だか不思議な印象を持つ。

（何か、不思議な人やなぁ）

ぼーっとそんなことを思っていると、何かがテラの隣を通り過ぎた。
何か通ったかな、と横を見ると、先程まで隣にいたリドルの姿がない。

「あれ……？」

視線を少し動かすと、どこかへ向かって走るリドルが目に入った。

「どこ行きよんやろ、リディ？」

そのまま彼を見ていると、リドルは依頼書の貼られた依頼板の前にいる、男の元で止まる。

「すっげー！　オッドアイやん、格好えー！」

リドルは大声で叫ぶと、その人物の背をバンバンと叩き始めた。
テラはそれがリドルのスキンシップだと知っているが、叩かれている男は顔いっぱいに不快を表している。
テラは呆れたように息を吐き、リドルの元へと向かった。

「リディ、初対面の人に失礼やろ」

しかし興奮したリドルは聞いちゃいない。テラは何度目か分からない溜め息を、また吐く。

こいつがすみません、そう言おうとテラは男を見上げたが、その動きがピタリと止まった。

テラの瑠璃色の瞳と、男の金と黒の瞳が絡まる。

「ちょお、しゃがんでくれん？」

口から、勝手に言葉が紡がれる。

男は何も言わず、すっとテラの前にしゃがんだ。

ゆっくりと、男に向かって腕を伸ばす。自らの手がそれに触れた時、テラの表情、雰囲気がガラリと変わり、彼女のキャラが崩壊した。

「耳ー！　めっちゃもふもふやん、きゃー！」

男は獣人のようで、灰色の髪と同色のふさふさな耳がある。

テラは、その耳を狂ったように撫で回していた。リドルにとってその光景は懐かしく、馴染み深いものである。

「お嬢ちゃん達、何しに来たんだい？」

黒髪の短気そうな男が、呆れ顔でテラ達を見ている。

ガキが来るとこじゃねぇ。

そう暗に言われているように感じ、テラはムッとした。

「……うちら、入局試験受けに来たんよ」

「そうそう！」

「じゃあ、そこの赤髪に聞いてくれ」

テラとリドルが集っていた男は赤髪の男を指差し、椅子にどすっと座り込んだ。

（会ったばっかやのに、失礼やったかなぁ）

赤髪の方へ向かいながら、先程の男をちらりと見る。

「何々？　お嬢ちゃんチェーニのこと気になってんの？」

どこからか聞こえた声にはっと我に返ると、目の前には赤髪の男がいた。

「う……わ！　びっくりしたぁ！」

テラは思わず尻餅を付きそうになったが、後ろにいたリドルに支えられ何とか転けずに済んだ。

「危なー……。ありがとう、リディ」

「ははっ、驚かしてごめんよー。俺、ロートっていうんだ。よろしくな」

「よ……よろしく」

赤髪の男、ロートが手を差し出していたので、前にいたテラがそ

の手を握る。

「そいでお嬢ちゃん、チェーニのこと気になってんの？」

「チェーニ？」

誰のことか分からずリドルを見ると、彼も分からないようで小首を傾げた。

「チェーニって、誰？」

「さっき君らが集ってた男の人ー」

ロートが指を指すのでそれを辿ると、そこには先程の灰色の耳を持つ男。何やら、短気そうな黒髪男と話している。

「あぁ、あの人。あの人がどしたん？」

「いやー、お嬢ちゃんがチェーニのことちらちら見てたから、気になってんのかなーって！」

「えっ、テーちらちら見よったん？」

リドルが前に回り込み、テラの顔を覗き込む。

「さっき大分困っとったみたいやけん、悪かったかなぁって思って見よったんよ」

「あぁ、ナルホドー。大丈夫！　見てて面白かったから、この俺が許す！」

「……それでかまんの？」

「かまんかまん！」

右手を突きだし親指を立て、ロートは片目を瞑る。
やっぱり、第一印象通り不思議な人だ。
テラはリドルと顔を見合せ、乾いた笑い声を上げた。

「なぁ餓鬼共、あんたらどこから来たんだ？」

ロートの不思議さに苦笑いを浮かべていると、どこからかともなく女の人が現れた。
黒のピッタリとした服は、スリムな体のラインを際立たせている。
茜色の髪を無造作に横に結い上げており、なかなか綺麗な顔立ちをしていた。

「和の国の、リバティ村ってとこやけど……？」

「それって田舎か？」

「海のすぐ側やけん、田舎になるんかなぁ」

「じゃ、知らなくて当たり前だな」

意味深な言葉を吐き、女はにやっと嫌な笑いを浮かべる。

（うわっ！　この人、口も感じも悪！）

テラはそんなことを思いつつ、女を怪訝そうに見た。

「知らんくてって、何を？」
意味深な言葉に興味を持ったアルゥが、その真意を問う。
「チェーニの正体だ」
「チェーニの？」
ただの獣人ではないのだろうか。
テラとリドルが首を傾けていると、ロートは焦ったように声を上げる。
「おいっ、アカネさん！」
「うるせーな。黙ってろよ、ロート。だいたいなぁ、お前はあの“忌み子”と親友とやらだからいいかもしれねーけどよ、いきなり忌み子を仲間に入れられたあたしらのこと考えろってんだ。このくそ鳥が」
忌々しげにロートを睨むアカネさん。ロートは哀しそうに俯く。
「“忌み子”って、何なん？」
気になったことを素直に問えば、アカネさんはにこぉと笑った。
その顔は綺麗だったが、恐ろしかった。
「チェーニの通り名だよ」
「通り名？」

「そ。忌み子の他には、“強欲で非情なハイブリット”ってのもあったな」

ハイブリッドとは、同じ種族同士から生まれる純血ではなく、異なる種族同士から生まれる混血のことである。

例えば、エルフと魔族。人間と獣人。その組み合わせは幾通りもあるが、世界のほとんどがハイブリッドの存在に否定的である。故にハイブリッドが蔑まれ、虐待を受けるのは珍しいことではなかった。

だがテラとリドルは、未だにハイブリッドに出会ったことはない。第一の故郷である魔の国は、ハイブリッドの入国は許されていなかったから会うことはまずない。第二の故郷和の国は、ハイブリッドの入国は許可されていたがリバティ村にはいなかった。

「チェーニが、ハイブリッド？」

だからチェーニが本当にハイブリッドだとすると、二人は初めてハイブリッドと会ったことになる。

「そうさ。あいつはここに来る前、金さえあれば何でもする何でも屋だった。だから、“強欲で非情なハイブリット”なんだ」

お前らもあいつが嫌になるだろう、とアカネさんはふふんと笑う。

「すっげー！　チェーニ格好いー！」

「本当やねー！　本当にすっごいわ！」

「……あれ？」

アカネさんが思った方向とは、違う方向へ行ってしまった。因みにロートは大笑いしている。

「アカネさん、ざーんねーん！　この子ら、そういうの気にしないみたいだなっ」

「がっ、餓鬼だから分かってねーんだろ！」

アカネさんはぷいっと顔を背けた。

「確かに俺ら今日会ったばっかやけん、チェーニがどんなことしてきたかとかは分からん。でも」

「過去なんか知らんし、どーでもいい。うちらは今日出会ったチェーニを気に入ったけん、通り名とかそういうん、かまん！」

そう言い切ると、アカネさんはうぐぅと小さく唸り、ロートはにっこりと笑った。

入局試験～リドル編～

「嬢ちゃん達気にしてねーみたいだけど、一応言っとくな」

他の人に呼ばれ、ぶつぶつと呟きつつそちらに行くアカネさんを送り出した後、ロートがぽつりと言う。

「チェーニの噂は、ほとんどがガセさ。実際のあいつは悪人ぶってるお人好しで、もし捨て猫がいたら、絶対に拾って帰るような奴なんだ」

チェーニのことを語るロートの表情は、とても穏やかだ。それを見て、テラとリドルも思わず柔らかに微笑む。

「うちらは、噂なんかに影響受けんけん。ねっ、リディ！」

「おう！　……それにしても、ロートはチェーニのことが大事なんやなー」

リドルがそう言うと、ロートは一瞬きょとんとしたがすぐに笑顔を浮かべた。

「まっ、親友だからな！」

へへんと胸を張るロートはリドルと被って見え、テラは思わず吹き出す。

「何笑いよん、テー？」

「別に深い理由ないけん、気にせんとって」

そう言いつつも、テラはぷぷっと笑っている。リドルはそれを見て、

「……変なテー」

「お二人さん、そういやぁ試験受けに来たんだよなー？」

ここへ来た真の目的を再び言われ、テラとリドルははっと我に返る。

「そやったそやった！」

「すっかり忘れてしまっとたわー」

「じゃ、試験内容どうする？　好きなの選んで」

そう言ってロートは、色々と何かが書いてある紙を差し出した。それを受け取り、二人は目を通す。

「試験内容って、いっぱいあるんやなー」

「そうやねー。『強さの適当な者と試合』、『怪物（エネミー）一体の討伐』……。んー、色々あるけど、うち適当な者と試合がいいなー」

「ほやなぁ。慣れたとはいえ、人のほうがやりやすいしな！」

テラの意見にうんうんと同意すると、リドルはロートを見てにぱっと笑った。

「ロート、『強さの適当な者と試合』にするわ！　俺ら、その方が全力で戦えると思うし！」

「おぉ、分かった！　ほいじゃ、まずはどっちからやる？」

そのロートの問いに、二人はきょとんとする。

「どっちからって、俺ら二人で戦うで？」

「うん。うちら、戦うことに関しては二人で一つやけん」

平然と言う二人にロートは、お笑い芸人にも負けない華麗なコケを披露した。

「おいおい、まじ？　普通、二人組で来ても試験は一人ずつ受けてもらってんだけど」

「え、そうなん！？」

「うちらそんなん聞いてないよー」

リドルは深い緑色の目を見張り、テラは拗ねたようにぷくっと頬を膨らます。

「ねぇロート、二人でやったらいかんのー？」

「んー……。今までもそういうルールでやっきたし、ダーメ！」

ロートが両手を使って大きな罰印を作ると、テラは口を尖らせた。

「……何なん、ケチ！」

「剥れてもダメなもんはダメー！」

「ま……まぁテー、一人ずつでもかまんくねぇ？　ほら、どんだけやれるようになったかっていう、腕試しのつもりでさぁ」

剥れたテラは写真を撮りたいほど可愛いが、試験を受けられなければ元も子もない。リドルは剥れるテラをまぁまぁと宥め、妥協案をだす。

「ほやけどぉ……」

テラは納得出来ないようで、煮え切らない声を出した。

「テー、試験受けれんなってもかまんのか？　仇、討つんやろ？」

そう耳元で囁くと、テラはピクリと反応した。

くるりとロートの方へ向き直り、声高らかに宣言する。

「もう、それでかまんわい。一人ずつやってやろうやん！」

「よーし。じゃ、どっちからだ？」

テラはちろりとリドルを見る。

“先にやれ”という念を込めてじいぃと見つめれば、リドルは諦めたように溜め息を吐いた。

「分かった分かった。俺からやるけん、そんな目で見んといてや」

「そっちの坊っちゃんからだな。試験相手は今から見繕うから、少し時間がかかる。だからそれまでは……」

ロートがこれからのことを告げているが、テラとリドルの耳には入っていない。

二人はシンクロしているかのように同時に目を閉じた。息を大きく吐いて、大きく吸う。呼吸のタイミングが合っている様は、まるで双子のようだ。

（大丈夫。うちらなら絶対受かる）

（大丈夫。俺らやったら絶対受かる）

カッと同時に目を開くと、二人は無言で拳をぶつけた。

いよいよ、大型ギルド、ライゼ・フォルクの入局試験が始まる――。

「って何で、俺の相手がさっきの人なん！」

「し……知らねぇよ！　あそこの赤鳥に聞きな！」

試験を行う演習場に移動してきたテラとリドル、そしてギルドの何人か。

テラは隅っこの方に立っているが、先に試験を行うリドルは演習場の中央にいる。そしてそのリドルと対峙しているのは、茜色の髪をもつアカネだ。

用を済ませてロビーに帰ってきたアカネは、ロートに「試験」の一言だけを告げられた後に連行され、今に至る。

「ロート、何でこのオバサンなん！？」

「おばさん言うな、くそ餓鬼！　あたしはまだ二十九だ！」

「……言うて、もう三十やん。三十路やん」

テラがぽそりと呟いた声は、恐らく誰にも聞こえていないだろう。因みにテラの中では、三十からオバサンに分類される。

「それはまぁ、俺の判断で！」

「てめぇの判断なんか信じれるか！　……それよりも餓鬼、さっさとするぞ！」

手首のリストバンドをいじりつつロートに吼え、そのままの顔でリドルを見るアカネはある意味圧巻だ。二十九には見えない綺麗な顔が台無しである。

「それじゃ、始――」

「あっ、リディ！　ごめんロート、ちょお待ってくれん？」

開始を告げようとしたロートに待ったをかけ、テラはリドルの元にトテトテと歩み寄った。

「？　テー、どしたん？」

「うちおらんのやけん、ちゃんと状況見て動くんよ？　あんたいっつも、『先手必勝ー！』って突っ込んでいくんやけん」

「そんくらい分かっとるわい！　ま、安心して見とけって」

片目を瞑り、リドルはテラの頭をポンポンと軽く叩く。

「も……もう、子供扱いせんとってや！」

むう、と剥れつつ、テラはリドルの顔をじっと見た。

柔らかく笑っているが、その面持ちはどこか真剣味を帯びている。先程までアカネ達とふざけていたとは思えないくらい、もうすぐ始まる戦いに意識を向けているのが伝わってきた。

いつの間にリドルは、こんな表情（かお）をするようになったのだろう。

（いっつも馬鹿騒ぎしよったのに、いつの間にこんなカオ……）

「どした、テー？」

黙り込んだテラの顔を、リドルはひょいと覗き込んだ。

「ううん、何もない。頑張って、リドル」

何年かぶりに愛称ではなく彼の本当の名で呼ぶと、テラは駆け足で元の場所に戻る。

「ごめんロート。もうかまんよ」

隣にいるロートを見上げると、彼は頷き宣言した。

「始め！」

＊

（久し振りにリドルって呼ばれた）

駆けていく小さな後ろ姿を、リドルはほけーと見ていた。心臓が、有り得ないくらいに踊りまくっている。

「ごめんロート。もうかまんよ」

後一歩でとろけそうだったリドルは、テラの冷静な声を聞きはっと我に返った。

（いかん、俺！　今はときめいとる場合やない！　試験に集中せな！）

「始め！」

ロートの開始宣言により、演習場全体に緊張が走る。

リドルも気を引き締め、相棒の双剣を一気に鞘から引き抜いた。反り返った刀身が、キラリと光る。

一方のアカネは、武器らしき物を何も持っていない。

（魔法で戦うんやろか？）

双剣を構え、相手をじっと見据える。

アカネもリドルを見ている。しかし、両者共に見つめあったまま

動かない。
演習場の緊張感が、段々と高まっていく。どちらが先に動くのか。それはリドルにも分からない。
風が吹き、アカネの茜色の髪を揺らした時。彼女が動いた。
「海から生まれし知恵高き誇り高き使者、“水猫(マリンキティ)”」
アカネの口から、凛と紡がれる一つの詠唱(スクリプト)。しかしリドルにとってそれは、聞き慣れたものであった。
(水猫か。テーによう食らったわ)
つと懐かしさに頬を緩めると、水で形作られた猫がリドルの目前に現れ、鋭い爪を出して飛びかかってくる。
リドルは水猫がかかってくるのとほぼ同時に後ろへ飛んで躱し、そして右手の剣で一閃。
水猫を形作る水が斬られたことで辺りに飛び散り、リドルの口元と腕を僅かに濡らした。その時チクリと小さく走った痛みは、水が冷たかったからだろうか。
(水猫は当たったらめんどいけんな。避けれて良かったわ)
水猫(マリンキティ)はなかなか厄介な水魔法で、水猫の爪に引っ掻かれば肉が裂け血が滴るのは必至。そして厄介と言われる最大のポイントは、水猫に触れると体が凍り付くことだ。攻撃と拘束を兼ね備えた魔法、それが水猫(マリンキティ)である。
(次は、俺から行かしてもらおか!)
リドルはふっと息を吐くと、呪文を唱えた。

「我の燃ゆる魂今ここに具現化せよ、“宿り火（インハビットフレイム）”」

唱え終わるや否や、右手に持つ剣が焔に包まれる。轟々と燃え盛る剣を、リドルはアカネの左肩をを目掛けて――投げた。

縦に回転しながら、火剣と化したリドルの相棒はアカネに向かって飛んでいく。

あと少しでアカネの肩を切りつける所まで飛んでいった時、ギリギリまで剣を引き付けたアカネは最小限の動きでそれを躱した。目標（ターゲット）を失った剣は、虚しく後方へと飛んでいく。

（避けられるんは想定内っていうか、思惑通り。俺が何の考えもなく、相棒の片方を投げたとか思うなよ）

左手の剣を右手に持ち替え、リドルはアカネが剣を避けたと同時に次の詠唱（スクリプト）を紡いだ。

「赦し請う者を無に返還する穢れなき焔、“聖火（イノセンスロジー）”」

顔面程の球状になった白い焔がリドルの前に出現し、そして剣を避けたばかりのアカネに向かって飛んでいく。リドルも、それを追うように走った。

アカネの遥か後方で先程投げた剣が、ブーメランのように弧を描きこちらに戻ってきている。まだ火を纏って回転している剣は、リドルの抜群のコントロールによってアカネの足首を切るように低い位置を飛んでいた。

（火球を避け、迫ってくる俺を見据えたところに背後からの剣が足を切る。突然の衝撃に驚いとるその隙に、首元に剣を突き付ける。よし！　これで絶対行ける！）

脳内で勝利までの流れを立てたリドルは、思わず口許が綻んだ。一人でも充分、周りを見て動くことが出来ている。

「混沌を吹き飛ばす神の風、“黄金風（ノーブルブラスト）”」

淡々と呪文を紡いだアカネの背後から、突風が吹き付けた。リドルの前を飛んでいた白き焔の玉はあっさりと、あさっての方向へと吹き飛ばされる。

（風魔法も使うんか、オバサン。まぁそれよりも、ステップその一、オッケー！）

にっと笑ったリドルは剣を逆手に持ち、そのままアカネに向かって行く。

アカネはそんなリドルを無表情に見つめていたが、ふっと視線を下に向けた。

（多分、足切ったな！　ステップ二、クリア！）

リドルは益々笑みを浮かべると、剣を振り上げる。足の怪我に気を取られているのか、下を向いているアカネの首にそれを――。

（よしっ、もろた！）

カキンッ！

「なっ……！？」

リドルが渾身の一撃を放つと、金属のぶつかりあう音が響いた。
リドルの刃とアカネの首の間には、何故か鈍色に光る刀身がある。
アカネは、武器を持っていなかったはずだ。

（どっから剣を……）

「……餓鬼、現役冒険者を舐めてもらっちゃ困るな」

「えっ……っぐふ！」

アカネの低い呟きに攻撃を受け止められ呆然としていたリドルは我に返ったが、遅かった。アカネはリドルの腹に、素早く蹴りを放つ。
文字通り、リドルは蹴り飛ばされ五メートル程吹っ飛んだ。しかし上手く受け身を取り、腹を押さえながらも素早く立ち上がる。
腹が妙にチクチクと痛むのは、彼女の蹴りをもろに食らったからなのか。

「ケホッ……オバサン、馬鹿力やなぁ」

「オバサンじゃねぇ！　それよりもほら、来いよ」

アカネはニタリと笑い、リドルの攻撃を受け止めた、見覚えのある刃の反り返った剣を構える。

「ちょお、その前に一つ。俺の剣、後ろから来よるって気付いとったん？」

アカネが握っている剣は、火は消えているが間違いなくリドルが

投げた剣だ。火を纏って回転し、しかも後ろから飛んできていた剣をどう掴んだのか。

「だから、現役冒険者を舐めんな。後ろの気配ぐらい、背中に目が付いてるかのように分かんだよ。そんな中で、剣をキャッチしお前の攻撃を防ぐぐらい、朝飯前だっつーの」

「ふーん。オバサン、やるやん」

「だからオバサン言うな、くそ餓鬼が！」

「オバサンこそ、餓鬼って言わんとってほしい、なぁ！」

言い終わるや否や、リドルはアカネとの距離を一気に詰めて斬りかかる。しかしそれは、アカネの持つ剣にうまい具合に往なされた。

リドルはめげずに次の攻撃――左下から右上に、剣を斜めに振り上げるようにしてアカネを斬る。だが、アカネは後ろに飛んでそれを避けた。

斬りかかっては往なされ、斬りかかっては躱される。アカネは決して、リドルに対して攻撃をしない。自分に斬りかかってくる剣を、ただひたすらに往なし、躱している。

リドルが攻め、アカネが防ぐ。そんな攻防が何分となく続いた頃。

（何か、変な感じがする……？）

リドルは、体に異変を感じていた。アカネと剣を交わらせる度に体の至るところがチクチクと痛み、何故か右腕と口が動かしにくい。

（剣右腕で持っとるけん攻撃の質が落ちてきたし、かと言って魔法を使おうにも口が動かんくて呪文が唱えれん。この状況、どう打破

しよか……）

頭でどうするかを考えつつ、リドルは重たい右手を無理矢理動かし剣を振るう。しかしアカネは涼しい顔で、その刃を弾いた。交わった剣が、火花を散らす。

その時また、右腕にチクリと痛みが走った。

（この痛みも、一体何なんやろか。何か、キモいなぁ……）

しかし、痛む箇所を確認するほどの余裕はこれっぽちもない。リドルが思うに、自分が少しでも隙を見せたらアカネはそこを突いてくるはずである。

（ほやけん、腕がもつまでは剣を振らな……！）

剣を握る手にぎゅっと力を込めると、アカネに叩きつけるように上から振り落とした。しかしそれは、アカネが持つ相棒の片割れがしっかりと受け止める。

左腕と両足が、チクリと痛んだ。

（くっ……。いかん、もう限界かもしれん）

顔が痛みに歪む。脂汗が浮き出ているのが、自分でも分かった。そしてリドルは上手く動かないその口で、到頭呼んでしまった。

「て……テー！」

自分が敵と接近戦をしている時、いつもその周りをすばしっこく動いている相棒（パートナー）の名を。しかし叫んでから、テラはいないのだと気が付く。

（そうや、これは俺の戦い。テーはおらんのやった）

はっと我に返るまでに出来た、僅かな隙。その一瞬の隙を、アカネは見逃さなかった。

受け止めている剣を押し返し、そして呪文を唱える。

「混沌を吹き飛ばす神の風、“黄金風（ノーブルブラスト）”」

再び、アカネの背後から突風が吹き付けた。それはリドルを確実に捉え、吹き飛ばす。

空に放り出されたリドルは、体全身にあの痛みを感じていた。一体この痛みは、何なのか。

自分が落下しているのを感じる。実際に、目は迫り来る地面を映していた。

（うっ……体、痺れとるみたいに動かん）

リドルは受け身を取ろうと体を動かしたが、しかし体は言うことを聞いてくれず、それは叶わなかった。顔面から、地面に叩き付けられる。

「あ……う……」

（……こんな、倒れとる場合やない。今は、試験中や。立たんと、終わってしまう！）

気持ちは既に起き上がり、剣を構えている。だがしかし体は、指一本も動かない。まるで麻痺しているかのように、体は動くことを拒んでいる。

「ロート。勝負は付いただろ」

全てが終わったこと告げるかのような、アカネの静かな声。それに少し遅れて、ロートが言葉を発する。

「あ、あぁ。えーっと、勝者はアカネさーん！」

今ここに、リドル・ローウェルの入局試験が終わった。結果は否、だ。

「リディ！」

愛しき、相棒（パートナー）の声がする。しかしリドルは、そちらを見ることが出来ない。体が動かないのもあるが、それ以上にテラに合わす顔がないのだ。

「あぁリディ、ボロボロやん！　“癒しの泉（ヒールスプリング）”」

テラはリドルの側に駆け寄ると、早口に癒しの魔法省略バージョンを唱えた。省略バージョンは主に、戦闘中に使われる。フルバージョンよりも癒しの性能は落ちるが、その分速く出来るからだ。

水玉がリドルを包み、そして弾ける。癒し、完了だ。

「……ありがとう、テー」

体が動くことを確かめながら、リドルはうつ伏せの状態から上半身だけ起こす。そして気まずいながらもテラを見ると、彼女はうるうるとした瞳でリドルを見ていた。

「リディ……。よう、動けとったよ？　お疲れさん」

「テー……。ありがとう」

ふんわりと微笑むテラを見て、リドルもはにかむように笑った。

「おい、餓鬼」

リドルとテラが座り込んだまま作ったほんわかとしたムードを、ぶち破るようにアカネがやって来る。

「オバサン……」

「だからオバサンじゃねぇ！　それより、ほら。お前のだ」

そう言って差し出されるのは、リドルの双剣の片割れ。リドルはそれを立ち上がって受け取ると、鞘に収めた。

「ありがとう」

「おう。……餓鬼にしては、よく動けていたと思う。一つアドバイスするなら、もう少し敵を見た方がいいな。お前、あたしが何の使い手だと思ってた？」

「魔法」

即答すると、アカネは大きく溜め息を吐いた。

「んなわけねぇだろ。あんくらいの魔法しか使えないのに魔法を武器にしてたら、あたしはとっくの昔に死んでるっつーの！　そっち

の餓鬼は気付いてたか？」

「魔法ではないなぁ、とは」

「え、テー気付いとったん？」

さらりと答えたテラにリドルは目を見開く。

「うん。やって最初に使うた水猫、うちやったら一匹やなくて四方に出すもん」

「わざとって場合やったら？」

「んー、それ言われたら分からんけど……。でも、うちは何となく魔法やないなぁって思っとった」

「そっちの餓鬼の言う通り、あたしは魔法の使い手じゃない。……餓鬼、戦ってる時、チクチク痛むの感じてたか？」

「感じとった！」

リドルは何度も首を縦に振る。

「それが、あたしの武器だ」

アカネはにっと笑うと、右手首に付けているリストバンドを外した。丁度リストバンドがあった手首には小さなケースが巻き付けられており、その中には――。

「……針？」

鈍く光る細長い針が、幾つも並んでいる。

「そう。あたしは“針使いの”さ」

「えっ、針使い！？」

針を武器に使う人を見るのは初めてだ。リドルとテラは、目を真ん丸にして驚く。

「お前が感じてたチクチクする痛みは、針が刺さってた証拠だ。最後の方、体動かなくなったろ？」

事実なので、こくりと頷く。

「あれは、針に塗ってた痺れ薬のせいさ」

「……体が動かんなって、麻痺しとるみたいって思いよったけど、みたいやなくて本当に麻痺しとったんや」

どうりで、段々と体が動かなくなるはずである。

「痛みを感じたその瞬間にちゃんと確かめてたら、お前に勝機があったかもな。ま、気付かれないように針を投げるのがあたしのスタイルなんだけど」

「やけん、もっと敵を見ろっていうことか」

自分では周りを見て動けていると思ったが、それは甘かったようだ。

「そういうこと。あぁ後、これはあたしの勘違いかもしれねぇけど」
「？」
「本当に、よく動けてたと思う。でも何か、ぎこちなさっていうか……そんなのを、感じたんだ」
「あぁ、それは多分――」
リドルは薄く笑うと、テラの肩に腕を回した。
「相棒がおらんかったけんや」
「うちら、戦闘だけは二人で一つやもんねー……って、この腕邪魔なんやけど？」
「……だから、ピンチの時に呼んだのか」
「そーゆーこと！」
リドルはアカネに向かって、満面の笑み付きのピースをする。因みに腕は、テラの肩に回したままだ。
「ちょお、何気にシカト？　ピースなんかせずに、腕どけてや」
「ええやん、ちょっとくらい」
「はっ、意味分からん。とにかく、はよどけて！」

何やらギャーギャーと煩いが、リドル・ローウェルの試験は幕を閉じた……。

パチン！

「いってー！　何なん、平手打ちとかひどいやろ！」

「自業自得や！」

入局試験～リドル編～（後書き）

三十以上の皆様、申し訳ありません……m（　）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6056w/

五神の国―光輪の仇―

2011年11月30日00時57分発行